

# 釣りを通して見えた未来


黒部川のほとりで、フライフィッシングにハマった子供たちと「ガッコのセンセ」の悪戦苦闘が綴られる。けれど、たくましく駆け回る子供たちと大自然とのぶつかり合いを期待したら、肩透かしに終わる。「くらし

が少しばかり自然に寄り添っているだけで、一人で山を歩ける子どもはいない」と、頼りない。それならなぜ、この本を取り上げたか。1990年代、中流の出し平ダムが排砂ゲートを開けた。大量の濁水が

富山湾に流れ込んでゆく映像を覚えている人も多いだろう。子供たちは当事者として、自分たちの川が破壊されていく様子を目の当たりにさせられた。これほど生々しい反面「教室」はない。彼らがどう感じ、どう動いた

のか。そして大人たちがどう「動かなかった」のかがよく分かるからだ。たとえば、子供たちは濁流を「絵の具を全部混ぜたよう」だと表現する。悪臭にまみれた河原で、「もう間に合わないのではないか」と悩むセンセの前に、浮き袋を持ったアズサとリョータが「これで川下りをするんだ」と現れる。

「そうだな、川とのかかわりを止めてしまわなければ大丈夫だ。『川は死なない』の章は、そんな言葉で締めくくられている。



## 宇奈月小学校 フライ教室日記

先生、釣りに行きませんか。



本村雅宏

## 宇奈月小学校フライ教室日記

先生、釣りに行きませんか。

本村雅宏 著

（フライの雑誌社・1800円）